新同人雑誌評

【同人雑誌募集】発行ごとに【三部】、左記の宛先までお送りください。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学内
三田文學編集部 新同人雑誌評 係

加藤有佳織

乾みやこ「空読みの鏡」（「苫小牧文学」27号）の語り手は小松利恵です。3年前に夫を看取ってからひとりで暮らしています。娘の朱美はたまに訪ねてきますが、「自分勝手で、我儘ものできつ」い娘は家の片付けや健康についての小言が多く、「自分の始末はほとんどできている」利恵にとっては煩わしいばかりです。やっと得た「自由時間」を過ごす彼女は、春のある日、町内のゴミ拾いに参加し、「空のかけら」が落ちているのを見つけます。楕円の手鏡が空を映していたのでした。青空を映すそれは祖母が持っていた朱塗りの手鏡を思い出させます。利恵が幼い頃、寝たきりの祖母は鏡を使って空を観察して天気を予想し、農作業にあたる家族を助けていました。利恵は、鉄製の枠で支えられた「クジラの腹ン中」のような布団に臥せる祖母のかたわらで過ごし、「空読み」のため動植物の様子を伝えることもありました。さて別の日、孫娘の咲姫から結婚を予定していると聞きます。そのあり様は利恵が知るものとは異なっています。祖母のいた「70年前を思い出していた」ところ、孫娘には「70年先を見せられた気持ちになっている」のですが、ともかくも結婚式のために姑から受け継いだ黒留袖や帯を取り出します。ところが黒留袖は裂け、帯には染みがありました。「一生持つのではなかったか？　代々受け継がれるものではないのか」と落胆し、修繕よりもレンタルが簡便だと判断します。また別の日、8歳上の姉から、母と義兄の法事について電話がかかってきます。母が利恵を「我儘、気ままな娘」と案じていたこと、祖母の鏡は利恵の元にあることが話題になります。どちらも利恵は忘れていたことでした。変わらないと思われていたのに変わるもの。親から引き継いで子へ渡していくはずがそうならないもの。つながりはないと思っていたもののしっかりと結びついていたもの。孫娘の結婚と母の年忌明けという節目に、それらが鮮明になります。「始末はほとんどできている」はずでしたが、家を見回してみればそうでもないようで、「クジラの腹の中」のようにたくさんのものが収められており、姑が残したものや子どもに残すつもりのものを前に「ゴミ？　まさか」と考えてしまいます。途方に暮れつつ、手始めに押入の奥から探し出した祖母の鏡に空を映そうとしたところ、しまわれていた布団が崩れ落ち、利恵は埋もれてしまいます。何日経ったのか、苦手だった近所の河本さんに助けられるのです。さっぱりと正直な利恵の声が生き生きとして小気味よく、5世代の経験とそのあいだに変わるものや変わらないものを日々の暮らしの感覚ゆたかに伝える作品でした。

　瀬崎峰永「寒いのはニガテ」（「ふくやま文学」第35号）

佐々木義登

飯田未和「いいもん」（「ｍｏｎ」Vol.20）は緩和ケア病棟に入院している父を巡る物語です。主人公「私」は母と交替で父を見舞っています。長年にわたる化学療法で体が弱った父、亡くなるまでの家族との交流が丁寧な筆致で描かれていました。せん妄で、あるものとないものとの区別があいまいになっていく父が指さす綺麗な箱、そこには何もないのですが、「私」は和菓子だと伝えます。「もっといいもんかと、思った」と言う父、また小説のラスト近く、父が逝った後、孫娘の結衣が紺色のクッキー缶をどこからか見つけてきて、蓋を開けると父の薬が大量に出てきます。結衣は「もっといいもん入ってるかと思ったのに」と、祖父とまったく同じセリフを言います。さりげないやり取りの中に、引き継がれる命の営みを見て取る読者もいるでしょう。父への敬意をさりげなく示す男性看護助手の藤江さんのキャラクター造形が見事でした。全体的に抑制した文体で、人間の心の襞が丁寧に描かれており、今回記念号だけあって力作ぞろいの「ｍｏｎ」の中でも輝きを放っていました。

　水無月うらら「大根犬」（「白鴉」第33号）の主人公、映美は通勤中に中古の家具家電店で、頭が大根、体が犬のぬいぐるみを見つけてもらいうけます。そして始まる大根犬との生活。映美の愛情が深まるにつれて犬は意思を持ったように動き出します。他者の視線に恐怖を感じる映美にとって、目の無い大根犬はかけがえのないパートナーになっていきます。ある日実家の母から片づけを頼まれ、大根犬とともに実家を訪れるものの、幼い姪が無邪気に大根犬の顔に目を書き入れてしまいます。後半部分、リップスティックで大根犬の顔の中心に書かれた巨大な一つ目を見て気絶する場面は秀逸です。映美が捉える独自の世界と、それを無邪気に壊乱する姪の行為が絶妙で作者のセンスを感じました。

　藤本紘士「バケモン」（「白鴉」第33号）は「大根犬」と同じ「白鴉」に収録されているものの、まったく趣を異にする作品です。主人公皆見は中年の閾に達していますが、特徴ある容姿を幼少期から中傷されていました。二日前、隣家との境にあるブロック塀の上面にマジックで「バケモン」と書いてあるのを見つけます。呼び起される学校でのいじめや、微温的な学校の対応、言語聴覚士の非難、そんな中で、皆見と母は被害届を出すため交番に向かいます。交番に居た警官はかつて主人公を中傷した名村と思しき人物で、主人公の脳裏には名村との記憶がよみがえり、彼こそがブロック塀に落書きしたのではないかという思いにとらわれるのでした。狭い地域に根深くはびこる、陰湿な心

加藤評

は、妻の妊娠をきっかけに12年間の結婚を終える瀬川が語ります。2年の交際を経て20歳の樹里と結婚したとき、瀬川は36歳でした。「嘲られても軽蔑されても仕方のない無様な姿」を見せながら「みすぼらしさを百も承知で求愛した」瀬川に、樹里は「深々と頭を下げて」から「こちらこそ、よろしくお願いします」と応えました。離婚を決めた瀬川にはそうした出来事が思い出されますが、自分ではない誰かの子を妊娠し、父親を明かさないまま産み、小学校教員を辞して育てると決めた樹里を見ると、彼女の夫であり続け、生まれてくる子を一緒に育てるという選択はできませんでした。彼は、自身の言葉によれば「昭和のおっさん」であり、「器の小さい私には無理だと思った」からです。有給休暇を利用し、役所に離婚届を提出してから弁護士事務所で嫡出否認の申し立てについて相談します。すべきことを終えて市街を歩くと離婚の「喪失感」はかえって深く、立ち寄った書店やCDショップで若い書き手やミュージシャンによる線の細い作品にふれるとそれらと自分との遠さが感じられ、「寂寥を味わ」います。思慮深く知的であることがうかがわれる瀬川は、樹里との年齢差をことさらに意識し、自分は「昭和のおっさん」であるとたびたび名乗ることで、「喪失感」や「寂寥」を紛らわしているようにも見えます。子の父親が明らかになった結末、樹里のアパートを去るのがためらわれた瞬間に瀬川は無防備になるのです。こうした語り口に、若い世代の線の細さを指摘する「おっさん」の繊細さがあらわれるのが巧みです。

大学のゼミ雑誌「呼吸」Ⅴは、瀬川が「鋭敏で絹糸のように細」いと感じるかもしれない作品集で、この瞬間にしかあらわれないであろう密度があります。星がつくる道は「トゲトゲに思っても」歩いてみると「柔らか」であるという着想がなんとも魅力的な**「空宙の歩行線」**（作者名非公開）、「血の繋がり」に悩む大学3年生が語り背伸びしないさわやかさのある**八木夏美「半歩のスキップ」**がとくに印象深い作品でした。

森田純「花麒麟の骨」（「樹林」Vol.690）が描くのは、元夫の子どもをファミレスでそっと見る智子です。結婚3年で別れてまもなく、元夫は別の女性と家庭を築きました。現在、元夫の子どもは中学生になり、再婚しなかった智子は筋腫のため子宮全摘手術をしました。少年の目元は夫、耳鼻は自分に似ているとさえ思う智子の「彼は私から産まれてくる存在ではなかったのか」という問いが切実に響き、二度の結婚と死別を経験した祖母の「どうしてこうなっちゃったんだろうねぇ。なんでかねぇ」という呟きと合わさり軋み、鮮烈な印象を残します。

同誌の**松浦幸恵「夢」**や**佐々木紫織「沼池が隠すもの」**は作品世界を着実に組み上げていました。**藤本紘士「バケモン」**（「白鴉」第33号）や**望月なな「カルダモンミルクティー」**（「ｍｏｎ」Vol.20）は達意の作品と感じました。

佐々木評

の闇が粘着質の筆致で描かれていました。母親が「バケモン」の文字を見つめ「なあ、これ、私のことやろか」と意見を求め、皆見が「違うやろ」と鼻で笑うラストが一転して軽妙でした。

亜木康子「鳥番　二〇二二」（「こみゅにてぃ」第116号）の主人公は公園の鳥の子育てを見守っています。最初十二羽いたカルガモのヒナはいつの間にか五羽に減り、別の池にいたカイツブリのヒナたちは夕立の増水で呆気なく排水溝に流されてしまいました。そんな鳥たちを見守る主人公の脳裏に思い浮かぶのは、昭和三十年代に乗用車の免許を取り、子供たちを車に乗せて走っていた母の姿です。急坂を走行中にギアが入らなくなって立ち往生し、バックしてくるダンプカーに向かって走り寄り、大声で危険を知らせた母の姿が何度もフラッシュバックします。過酷な環境で暮らすカルガモの親子と、母の車の記憶は交錯するうちに、「引っ越し」というキーワードで結ばれます。父の転勤先に向けて子供たちを乗せて向かう途中、体験した恐ろしい記憶。そこに秘められていたのは言葉からは想像できないほど切実な母の思いでした。

森田純「花麒麟の骨」（「樹林」Vol.690）の主人公、智子はファミレスで中学生の男の子を眺めずにはおられません。その子は離婚した元夫と、新たな妻との間に生まれた子供なのでした。おりしも彼女は筋腫で子宮を摘出したばかり。心のうちに去来するのは亡くなった祖母と、彼女がかつて好きだった花麒麟の思い出でした。子を産み育てる役割を至当のものとして、女性を規定しがちな社会への批判が透けて見える作品です。

津木林洋「ハンモンク」（「ｍｏｎ」Vol.20）は心と体の不調で休養を余儀なくされた妻の麻美と、夫の俊二の恢復の物語です。ショッピングサイトで買ったハンモックを持って河原に行くと、カラオケを熱唱している男がおり、彼とひょんなことから親しくなります。ハンモックを「ハンモンク」と発音するコミカルな男との交流を通して、麻美は少しずつ明るさを取り戻してゆきます。爽やかな読後感をもたらす良作でした。

田中一葉「大丈夫じゃないのに、大丈夫と答えてしまう問題」（「ｍｏｎ」Vol.20）は私たちが日ごろ何気なく使っている「大丈夫です」という言葉を改めて問い直す作品でした。ほとんど無意識にさえ使われる言葉を、一度リセットすることで、物事の見え方が一新されるような面白味を感じました。

それ以外では、**望月なな「カルダモンミルクティー」**（「ｍｏｎ」Vol.20）、**キンミカ「金サーモンの目玉」**（「ｍｏｎ」Vol.20）、**西村郁子「縄文ダンス」**（「せる」Vol.122）、**北川まなみ「バックスライド」**（「呼吸」Ⅴ）、**瀬崎峰永「寒いのはニガテ」**（「ふくやま文学」第35号）を興味深く読みました。